
楽園の花

さゆ & 梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の花

【Nコード】

N7302X

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

あの笑顔を失われてしまったら　　これは、そんな恐怖に駆られた、必死に楽園の花を守ろうとする人々の話。

(前書き)

さゆと他の友人に「白い病み系」と言われたお話。書き手としては「純粋な狂気」のお話。

小さな姿の、中々見られない姿をした動物達。
彼にとって唯一の、大切な存在となった者達の、相棒達。

その戯れる様を微笑んで眺めていた青年は、部屋の外に感じた気配に扉を見た。

コンコン

「どうぞ」

重々しい音をたてて開いた扉の先にいたのは、青年の思った通りの人物で。彼は笑みを見せながら問うた。

「どうしたの？」

「そろそろお食事を、と思ひまして」

「ああ、もうそんな時間か」

彼のいる部屋には、時計がなかった。

時間など忘れてほしいと願う、彼にとって唯一の存在達の言葉の受け入れた為に。

「わかった。さあ、みんな行こう」

彼の言葉に、戯れていた動物達は従う。彼らにとっての相棒
あるいは、主　　達が、彼を認めているから。

「今日は一日和食尽くしなの？」

「…うん。何か食べたいもの、あった？」

「風が作ってくれるものなら、何でもいいよ」

ほわりと笑いかける青年。風と呼ばれた美女は、同じくほわりと笑り返す。

「にしても…、最近、全員揃わないね」

「綱吉さんが望むのであれば、揃うようにしますが…」

「無理はさせないでね？」

皆、オレの為に無茶すぎるんだから

「ツナの願いなら、何でも叶えたいんですよ」

「もう十分。」

「悪い！遅れたっ」

そこへ駆け込んできた青年に、彼は瞳を煌めかせた。

「武！ 久しぶりだね」

「ああ、元気にしてたか？ツナ」

「見ての通りだよ」

細やかなスキンシップとともに、にこにここと交わす会話。そこへ、中学時代から変わらない様子で銀髪が割り込んでくる。

「さて！今日はこれで全員ですので席に着きましょう綱吉さん！」
「あ、うん」

「…獄寺…」

「何だ遅刻野郎」

「……いや」

ここで睨み合いが勃発し、急速に集結するのいつものこと。何せ、彼らが止めるまで、彼らにとって唯一無二の青年はにこやかに（全く他意は無く）見守り続けるからだ。

今のような…食事時で、食欲を感じている時でさえも。

「……」「頂きます」「……」

手を合わせて合掌。目を閉じて少し頭を下げた青年の隣で、動物達もひよこりと頭を下げている。

目を瞑っている者の方が多いが、見ている者にとってはとても微笑ましい光景だ。

「やっぱり美味しいね。っていうか、また腕上げた？」

「…ありがとう」

「本当に美味しいです、クロームさん」

「久しぶりに和食らしい和食食ったのなー」

「意味わかんねえよっ！　っと…綱吉さんの言う通り、やっぱり上手くなってるんじゃないか？」

「そう、かな？」

はにかむように言う美女は、“美女”というには少し可愛い。時間は彼らの関係を緩和させ、こうまでも笑顔を交わせる間柄となった。

「……ツナ、夕飯、食べたいものはある？」

「うーん…そうだな、何となく茶碗蒸しとか食べたい気分かな」

「わかった、頑張って作るね」

「楽しみにしてるよ」

彼の…歴代最強の、ボンゴレの大空と呼ばれた青年の、その、笑顔。

それを向けてくれることこそが、彼らにとっての、至福。

沢田綱吉が、ボンゴレのボスの十代目に就任して十年近く経った頃。

彼のボス就任前からの悲願と言っても良い計画は、着実に進行していた。彼を取り巻く、七人の守護者達の力を得て。

「……ふう…」

一段落した書類の処理に、息を吐くボスに、傍らに控えていた名実ともに右腕となった銀髪の青年は声をかけた。

「あの、十代目」

「うん？ 何？」

「計画を実行して、何もかもが終わったら。…どうなさるおつもりですか？」

「何そのフラグ」

苦笑して告げられた言葉に、真剣に同じ質問を重ねられ、青年は困った顔になりつつ、言った。

「特に、決めてないよ。でも……そうだな、」

昔みたいに、穏やかに過ごせたら、良いのにね。

「……“昔みたいに”……ですか」

「無理だとわかってるけど、さ」

遠い目をして、懐かしむ様子を見せる彼に、銀髪の青年は目を細める。

「……では、」

そして立ち上がり、唯一無二、至上と仰ぐその人が座る椅子の隣に、跪いた。

「え、ちょ、」

「オレ達に、貴方の残りの時間を下さいませんか」

「………“オレ達”??、それに、“時間”??」

「はい」

それが誰を示すのか、何を示すのか。言わずともわかるはずだと、
膝き頭を垂れている青年の無言の空気が告げている。

「どうして…今、そんなことを？」

「早めに言っておかないと、他の者に取られては敵いませんから」
「そんなもの……望む人なんてそうそういないと思うけどなあ……」

苦笑して告げる彼の計画は、とても壮大なもの。

マフィアの親玉と化したボンゴレファミリーを、自警団としての
姿に戻した上で、更に可能な限りのマフィアを統括し、ファミリー
自体は瓦解させようというものだった。

ボンゴレ？世の意思を継いだ上で、ボンゴレリングというある種
の始まりを招いたその中に在った“ボンゴレの業”を継承した際
に見せた、その覚悟のそのままに。

けれども計画を成功させた後、彼の身が安全とは限らない。

沢田綱吉の容姿、性格、能力、その他諸々は多くの人に知られて
いることだし、利用しようと思えないはずが無い。

その為に、彼は死ぬ気ではなくとも、世間から身を隠す、もっと
言えば自身の社会的抹消すら覚悟していた。

「オレ達にとっては、他の何よりも価値のあるものです」

「そ…か」

照れくさそうに、彼は頭を掻いた。

「……わかった。只一つ…ううん、幾つか、かな。条件があるんだ
けど」

やがてゆつくりと告げられた了承に、銀髪青年はパツと顔を上げ、問う。

「…何でしょう？」

「まだ秘密」

即答で返ってきた返事に、へによりとその瞼が下がる。

「急ぐことは無いでしょ？　まだまだ先のことだしね」

計画だってゆつくり進行してるんだからさ

「それもゆつくり、考えていけばいいよ」

焦ることは無い。

「ずっと、オレはみんなの…ううん、これからは君達の、かな。為に在るから」

その言葉に、蕾が綻ぶような華やかな笑顔を見せた右腕に、彼は曖昧な微笑みを浮かべた。

計画は、実行された。結果は、勿論成功。故に、彼らは、彼の
沢田綱吉の、残る人生の全ての時間を手に入れた。

「んん？」

食事後の、ブレイクタイム。

紅茶を飲みながら膝に己の相棒を乗せ撫でつつ、他の動物達も構っていた青年は、ふと、窓を見た。

「どうかしたのか？」

部屋には、彼と、黒髪の青年を除くと後は動物達だけ。

「んー、とね。珍しい人が来てる、みたい？」

「へえ。誰だ？」

「うーん…たぶん…」

多分だけど…と呟きつつ、彼は足元で棘が刺さらないようにいてくれているハリネズミへ、手を伸ばした。

「おいで、ロール」

きょとん、と彼を見たハリネズミは、差し出された手の上にちょこん、と乗った。

そして彼は膝に乗せていた相棒を椅子の上にひよい、と置きつつ立ち上がり、窓を開けるよう親友に頼んだ。何せ、片手で開けるにはこの屋敷のどの扉も重すぎるのだ。

お安い御用、と開けてくれた親友に礼を言いつつ、行っておいでと告げる。ハリネズミは彼を一瞥した後、ひょいっと窓の外へと出て行った。

「アイツを外へやったってことはさ、ヒバリが来てんのか？」

「多分ね。寄ってってくれるかな……」

「何ならオレがひとつ走り行ってくるけど？ツナが呼んでるってさ」

「顔を見たいじゃ、あの人用事だと思ってくれないじゃん？ 用もないのに呼び付けたら、咬み殺されるって」

「ツナに限ってそれは無いと思うのなー」

そんなわけないじゃん、と応えながら、彼は窓を閉めた。屋敷の周囲はどうやったのか、一応四季はあるようだが暑すぎることも寒すぎることもない。それでも肌寒くは感じたので。

「っと……ちよつと身体動かしてこようかな。武はどうする？」

「オレはちよつと休むかな」

「そっか。ゆっくり休んでね」

ほわり、と笑顔を交わす。そして彼は己の相棒を肩に乗せつつ、動物達にどうするかと問うた。

勿論言葉を話せるわけではないが、言葉はなくとも行動でその意思は示される。この時は久しぶりに主と会った二匹以外が、彼に同行する意思を見せた。

屋敷の地下に造られた、訓練場。

空間を広く取られたそこに、地を、宙を、自在に青年は動き回っていた。

それはもう、慣れた動作。そして段々と俊敏さはあがっていく。死炎を操る他の誰にも負けない彼のスピードは、危険な戦いをしなくなった今も、衰えることは無かった。

備え付けられた機械が、仮想敵を作りだし彼の前に立ちはだかる。尤も、敵というにはお粗末な存在なのだが。

強度は如何にしたのか、ボンゴレの技術者が誇る最高強度と同じだけのものがある。なので彼は躊躇いもなく？バーナーを放った。だが、最高炎圧で放てばボンゴレの誇る強度を持つ訓練場と言えど敵わないことは彼の超直感が告げていたので、炎圧は抑え気味だ。両手のバランスを取る為に必要な間も、段々と縮まってきている。もう少しで、元家庭教師様の早撃ちにすら対抗できるのではないかというくらいには。今はまだ、肉弾戦に持ち込んだ方が勝ち目がある。というかそれで既に幾度か勝っている。

仮想敵を倒し、一段落したと思った途端に殺気を感じ、彼は身を翻した。

「やあ」

「恭、弥…」

「君がこっちにいるって聞いたからね。丁度良い、相手してよ」

「……怪我は？」

「怪我？僕が？」

見ての通りだけど？

「……治して貰ったばかりなのだろう、無茶はするな」

「君はいつもそればかりだね」

でも、大丈夫

言葉とともに構えられた、見慣れた銀色の武器は、鈍い色を放ち、楽しそうな笑みを浮かべている青年からは、隙は感じられない。…数十分前まで、怪我をしていたはずの、その気配すらも。

けれども、彼の超直感が告げている、それが真実であると疑わないし、目の前の青年も否定はしなかった。

大きく溜め息をつき、彼は抑え気味の炎圧を少し上げた。本来は本気で戦わねばこの青年は怒るが、壊すわけにはいかない訓練場で本気を出すわけにもいかない。

「やっとその気になったね」

ロール、と呼ぶ声に、どこまで本気でやるのかと内心睥睨するが、一応付き合って彼は己の相棒を胸の内と呼んだ。

「極限元気だな綱吉！」

「了平さんも極限お元気そうで…京子ちゃんはお元気ですか？」

「もちろんだ！」

「それは、良かったです」

試合（？）を終え、休憩しているところに、二人の様子を見ていたらしい彼は元気良く現れた。

「そういえば…恭弥さん、動き回って大丈夫なんですか？」

「うむ。ちよつと腕をざっくりやられただけなのでな、本人は平気だと言っていた」

まあ、血もさほど出ていないし、あれだけ暴れまわっていれば平気だろう

「……………そうですか」

呆れたような声は、その色そのまま目の前の青年に伝えたようだ。

「なあに、元々大した相手じゃない。心配することは極限何も無いぞ！」

「……………そう、ですか…」

「どうだ？」

「ちょっとヤベーな。アルコバレーノが勘付いてるみてーだ」

「二日前、こっちに探りが来たよ」

「ちゃんと誤魔化したんだろうな？」

「僕を誰だと思ってるの？」

「リボーンだったらこっくら辺に乗り込んでくる可能性もあるんじゃない？」

「…」

「極限、何の為に前とクロームを常時ここに置いていると思ってるのだ？」

「うつ…」 「ボス…ツナの身を、奪われない為」

「全く、アホ牛が。これはダメエが立候補したことでもあるんだぞ」

「うつうつ、ランボさん頑張るんだもんね…」

「まっ、暫くはオレもここににいるから」

「入れ替わりでオレは資金繰りに行ってくる。」

「そついや六道は何してんだ？」

「…………骸様、最近狙われて、逃げてるところ」

その言葉に、それぞれが驚きを示し、大丈夫なのかと問う。

「…今のところは。でも段々、ここに近づいてきてるみたい…」

「厄介だね。彼が梃子摺る相手…面倒なことこの上ない」

「ヒバリらしくないのな」

「お前もつと好戦的じゃなかったか？」

「何言ってるの。仮にも“霧”が梃子摺る相手なんですよ。無傷で終わらせられないに決まってる。そついたら…流石に言わなくてもわかるよね？」

「「「「「……………」」」」」

沢田綱吉が、己の時間を差し出すに出した条件。それは些細で、それでいて彼にとつては大きな意味を持つもの。

一つ、彼のことを下の名前と呼ぶこと。一つ、なるだけ全員で過ごすこと。一つ、怪我をしないよう努めること。……

他にもないわけではないが、代表的なところでこの三つ。

彼らは多くのことを彼に告げていない。

この屋敷に彼を軟禁するように閉じ込めたその理由。何も教えないその理由。ただただここにいてと願うその理由。……

結果的に、同じ答えに行きつくそれらを、決して彼は問いはしなかった。

ただ彼らの願いを聞き、その殆どを微笑みながら受け入れただけだった。

ずっと前からわかつていた。いつの間にか、彼自身の存在意義が、誰かの為に、となつていることに。

“誰か”の為に彼は計画を進行させ実行、成功させようとしていた。しかし、その後は？

一つの存在理由を失い、その後彼はどうやって過ごしていくのか。あの、誰もが絆され愛した優しい笑みが、ちゃんと見れるのか。

悩み、あるいは最悪の事態を避けるにはと、いつしか六人の守護者達は、大空の関与なしに、越えられない筈だった壁をも乗り越え、手を組んだ。その結果が、この状態。

彼に、意志がなくなつたわけではない。それどころか、強くなつていようにも見える。元々頑固な性質^{タチ}だったこともあるのだろう。何も知らないでいてと、言葉にしたわけでもないのに感じ取っているらしい願いに、彼は応えてくれている。

彼らが怪我をしてくる理由にも、薄々勘付いているだろうに。…彼が、気付かない筈が無いのだ。誰よりも仲間が傷つくの嫌い、仲間が傷つくくらいなら自分がと、飛び出していく性格の彼が……

「まずは、六道から情報を貰わないとね。その分だと、相当危ないんじゃないの？」

「……たぶん」

「どっちの方角だ？ 獄寺と拾ってくるぜ」

「オレもかよ！ ってそれより、どうだ？」

「……南…ううん、南南東。距離は移動してるからはっきりとは言えないけど…今のところ、100kmくらい」

「ってことは、あっちですね」

「うむ、では俺も行こう！」

「…この場合、僕は残った方がいいんだろうね」

溜め息が漏れた。

沢田綱吉という存在を秘し、独占する為に。彼らは彼の計画と同時進行で、己達の願いの為の計画もスタートさせた。

いつしか貯まる一方にあった金を、誰にも知られるよう細心の注意を払いながら移動させ。土地をこっそりと買い、幻術等で惑わした技術者に設計した屋敷を建てさせ。カモフラージュや強度の補強

等、炎の力も多く利用した。何年も綿密にメンテナンスしながら作り上げた屋敷は、自身よりも他人を優先するある意味孤高の獅子を軟禁する為の檻なのだ。

彼らがいつそ異常なまでに警戒する理由の一つに、彼らの手に在るリングのことがある。そこにあるのは、ボンゴレリングではなかった。

失われた未来のように、砕いたわけではなく、封印した。元ボンゴレ本部の、その地下、超直感が無ければ生きて帰れないというその場所の奥深くに、零地点突破初代エディションによって。

精製度はランクAはあるのだが、長年使用してきたリングに比べれば“慣れていない”。そのせいで怪我をすることもしばしばだった。

「ん…？」

今の、って…

ソファに深く座り込み、漢我流を除く守護者のアニマルと戯れていた彼は、外に飛び出していった気配に、何かあったのかなあと呟

いた。

そこへノックの音がして、どうぞ、と声をかけると、紅一点となつた彼女がいた。

「風？」

「……みんな、用事が出来て」

「ああうん……。風、大丈夫？」

問いかけに、美女はことり、と首を傾げた。

「顔色は……悪くないけど。調子、悪いよね」

「……大丈夫」

立ち上がった彼は、片手を彼女の頬に当て、目を合わせた。

「本当に？」

「………」

「…、こつち、おいで」

ソファまで誘い、そこにいた動物達に場所を空けてもらった彼は、自身が座ってから彼女に隣に座るよう促し、そしてそのままその身体を引いた。

「っ」

「ちよつと、休んだ方がよいよ。…大丈夫、オレが“肩代わり”

してあげるから」

「！！」

無理矢理膝枕をしてもらつた体勢になつた彼女は、息を呑んだが、

それよりも彼の言った言葉に身体を震わせた。

「君が休んでいる間だけ、ね。少し眠るといい。楽になるよ」

「で、も……ボス」

「もうボスじゃないってば。骸には、オレから話しておいてあげるから」

「……ごめん、なさい」

「謝罪は好きじゃないなあ」

彼女は、頭を静かに撫でられ、その心地良さに誘われるまま、目を閉じた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

ポウ、と彼の、彼女を撫でる手に嵌められたリングが輝いた。

橙色だった光はやがて、所々に藍色、緑色、紫色、黄色……と順に違う光を宿しだす。

常時、屋敷には霧がいていることになっている。それは、屋敷を隠すためのカモフラージュを常に維持する為。世で最も純度の高い霧の炎を持つであろう六道骸が適任なのは自明の理だが、彼は屋敷に留まるよりもせねばならないことがあった。

何より女性であるが故にあまり荒事に向いていない彼女が、屋敷に留まり維持に尽力することは、誰が言わずとも自然と決まっていた。

だがそれは、如何なる時も意識し続けねばならないということ。深く考えずとも、他の六人に比べ最も過酷な役割とも言えた。しかし、彼女はそれを受け入れた。

そうすれば、如何なる時も、彼の傍に、いられるから。

コンコン

「どうぞ」

重々しい音を立てる扉を開けて入って来たのは、彼の膝で眠る彼女が、命の恩人と仰ぐ彼だった。

「…風は」

「少し、眠っているだけだよ。 骸、怪我は？」

「先程治して貰いました…、その、綱吉君、」

「オレは、何も知らない。何も聞かない。」

やや口籠りながら何事か言おうとしたオッドアイの青年を、彼は遮った。

「ただ、“家族”が辛そうにしていたから、力を貸しただけ、だよ？」

「……そう、ですか。すみません、僕が無茶をさせたばかりに…」

「そうだね。風は女性なんだからもつと気をつかってあげなくちゃ。あと、謝罪は好きじゃない。」

「…氣をつけます。それと…ありがとうございました」

「頼むよ。どういたしまして」

やや厳しめの顔をしていた彼が笑顔を向けてきたのを見て、オツドアイの青年は儚げな笑顔を見せる。

そして、彼の視線は輝く彼の手のリングへと向かった。

「調和で場を乱せるのならば、そのまた逆も可能だろう」でしたか。……その通りですね」

「まあね」

彼が彼女に言った“肩代わり”とは、彼の炎の特性、大空の調和を以て、常時使用されていく霧の炎の代わりとするもの。「全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する大空」ならば、後者の“飲み込む”だけでなく、“他に染まる”ことが可能であろう、と。そう考えた彼が編み出した、一種の特技である。未だ、彼以外の大空属性を持つ誰も成功していないからだ。

尤も、欠点はあるが。

「外での仕事は、一段落したの？」

「ええ。」

「じゃあ今日は、みんなで夕飯食べれるかな……」

「出来ますよ」

「ほんと？」

パアア、と輝く彼の表情に、癒されるのを感じながら、青年は笑顔で頷いた。

「じゃあ、そろそろ風に起きて貰わないとな……」

「綱吉君、風の役割はここにいる間僕が引き受けます。大丈夫ですよ」

「そう？　じゃあ、はい」

彼のリングの輝きが少しずつ消えていく。　と同時に彼は膝で眠る彼女の背を軽く叩き、目覚めを促した。

「ん……」

「風、骸が来てるよ」

「…くろ、さま、が…？」

半眼で彼を見上げていた彼女は、やがてソファの前に立つ人物へと目を向ける。

「骸、様っ」

「そのままでいなさい、風。……貴女も、あまり無茶はしないように」

「…はい」

「いや、最初に休むよう言ったのオレだけどさ、そろそろ夕飯準備しなきゃいけないだろ？」

「「あ」「

ハッとした様子の彼女を、そっと起こしてやって、彼は微笑んだ。

「夕飯、楽しみにしてるから。全員分ね」

「…はいっ」

元気に部屋を出ていくのをそれはそれは慈しむような愛おしむような微笑みで見送って、彼は棒のように突っ立っているオッドアイの青年を見上げた。

「どうしたの？骸」

「……いえ、何も」

「……………お前、嘘が下手になったなあ」

苦笑して立ち上がった彼は、頭半分高い青年の顔を両手で捕らえて、無理矢理目を合わす。

「つくなら、もっと上手くつけよ。オレが、騙されてやってもいいと思えるくらいに」

今の嘘のつき方なら、ここにいる人間なら誰でも気付くぞ？

「…すみません」

「で？ どうしたんだ」

切なげに、儚げに、その顔が歪む。

「宝物が、あるんですよ。大切に、大切に、したくて、守りたくて、頑張っているのに……奪おうとしてくる下衆が、沢山いるんです……」

言いながら、青年の瞳には狂気に似た色が浮かんだ。それを、彼は知ってか知らずか、相槌を打つように囁く。

「それで？」

「…そのことに、少し疲れてしまつて。それだけ、です」

「そっか。オレにできることがあつたら、何でも言えよ？」

「わかっていますよ」

青年の言葉は、青年だけの思いだけではない。目の前に在る彼以外の、屋敷に居る全員が思っていること。

それを彼は知ってか知らずか、労わる言葉を紡ぐ。知っている
ような、知らないような、絶妙な空気。知っていれば唯の狂気、知
らなければ唯の無知。

そのバランスを、意識的にか無意識にか、上手に取りながら

「いただきます」

「「「「「いただきます」「」「」「」

本当に久々に、食卓に、彼が家族と呼ぶ全員が揃った。
彼の笑顔が失われることを恐れ、徒党を組んだ者達が。

「やつぱ風、料理上手になったね。これ、美味しいよ」

「…ありがとう」

「綱吉、これ」

「え、どうしたんですかそれ！？　っていつかそんなのあるんだっ
たらもっと早くに出しましょうよ！」

「オレ、猪口取ってきます」

「さすがはヒバリなのなー」

「というか僕の目の前に一升瓶を置いたのは嫌がらせですかそうですよねこの鳥が」

「六道氏、弱いすもんね…」

「黙れ牛」「ってというか鳥言うな南国果实」

「喧嘩禁止！ どうしてもっていうなら後で訓練場で食後の運動ね」

「それは食後の運動ですまん気がするが…」

「…身体に、良くないわ骸様、恭弥、ランボ」

「え、オレもですか!？」

「今のうちに酔い潰しちゃえばいいんじゃないかー？」

「六道氏は兎も角雲雀氏は呑んでくれないじゃないですか!！」

「僕が酌を受けるのは綱吉だけだよ」

「恭弥さん意外と強くないよ？」

「それは君が強すぎるだけです!！」 「それはツナが強すぎるだけだと思っのな」 「君が強いんだよ」 「ツナが強いんですよ!」

「!」

「!」

「綱吉は極限枠だからな…」

「どうぞ綱吉さん!！」

「あ、ありがと隼人。」

そっかなあ、と呟く彼に、脱力する面々。

そこは、楽園。 外で行われている戦争など、誰も知らぬ振りして、ただ笑顔だけが花開く。

(後書き)

b
y
梨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302x/>

楽園の花

2011年11月14日04時51分発行